

# アクセルを踏み続けよう



織田ゆかり

九州大学大学院工学研究院応用化学部門  
[819-0395] 福岡市西区元岡744  
助教, 博士(理学).  
専門は高分子化学, 高分子表面・界面.  
y-oda@cstf.kyushu-u.ac.jp  
www.cstf.kyushu-u.ac.jp/~tanaka-lab/

春。研究室では大学院生たちが進路選択の話に花を咲かせる。先生方や先輩からの話、企業ホームページなどから集められる情報を基に、自分の将来や人生を考える。背中から聞こえてくる会話には期待と夢が溢れている。学校のように、同級生たちとある程度一緒に進む道と違い、ここでの進路選択や就職活動は、一人ひとりがついに自分の道を拓く、場合によっては人生を決定づける大きな選択だ。難しいけれど、何よりも楽しい。

本欄の趣旨は、男女共同参画の視点を含む先輩からのメッセージであるが、残念ながら筆者は先輩というには仕事も私事も経験に乏しい。そこで、自身の進路選択とこれまで考えてきたことについて、恐らく多くの女子学生が悩むであろう視点を含めながら思い返してみたいと思う。そして男女問わずこれから将来を考える方々の参考、あるいは反面教師になれば幸いである。

多くの人がそうだと思うが、働くからには人の役に立ちたいし活躍したい。私の場合、修士課程の進路選択時には「仕事」と「私事」のバランスは全く考えず、進学を決めた。当時は、具体的な人生計画はとくになく、とにかく将来仕事で活躍できるように力をつけることが最優先、私事はなるようになるさ、と考えていた(もちろんこれは、私が運良く好き勝手なことをできる恵まれた環境にいたから言えることである)。一方、とくに私の周囲のしっかり者の女子友達の多くは、結婚、出産・育児、介護などの将来を見据えながら、職種、福利厚生、勤務地、海外勤務の可能性などをよく調査して就職活動に臨んでいた。「今考えても先のことなんてわからないでしょ。」「いやいや、今から計画しておかないと後々困る。」当時そんな答えのない議論を深夜まで延々と続けていた学生時代が懐かしい。

楽観的に半ば夢を見ながら進学した私も、博士課程の就職活動時期には人並に人生に対して不安を感じつつあった。当時アカデミックポストに就くことを目指していたが、そもそもこれが難しく、そこで生き抜いていくことはさらに厳しい道であるという現実を少しずつだが知り始めると同時に、少しは仕事の目途がつかないと「私事」の計画も立てにくい、あるいはそ

の逆もしかり、ということを実感し始めたのだ。そして修士時代の議論が思い起こされた。もちろん、これからの研究者としての挑戦に心躍っていたが、心のどこかでは見えない将来への不安がずっと付きまとっていた。そんな中、Sheryl Sandberg (Facebookの最高執行責任者)の著書、『LEAN IN』の中の、「仕事を始めるときから出口を探さないでほしい。ブレーキに足を載せてはいけない、アクセルを踏もう。」というフレーズに心を励まされた。考えすぎて守りに入るより、攻めの姿勢でいなければと思った。

その後、現在の勤務先である九州大学で仕事の機会をいただいてからは、目の前の仕事に一生懸命取り組むことで悩む時間はなくなった。うまくいかないことや失敗も多く、私にはやっていけないと諦めそうになったことが何十回もある。しかし、狙いどおり、あるいは予想もしていなかった実験結果が得られたときの感動、これを学生と共有できたときの嬉しさ、一つの仕事をまとめたときの達成感を覚えてしまうと、やはりどうしてもこの仕事は諦められない。ましてや、これまでたくさんの方々からいただいたご指導と応援を思い返すと、ブレーキを踏むのではなく、しがみついても粘ろうという底力が湧いてきた。

「私事」としては、半年ほど前に結婚した。企業で働く夫とは別居生活である。数年前までは別居前提での結婚には少なからず抵抗があり、このような決断はできなかつたろう。しかし周囲の方に背中を押してもらったおかげで、将来が明確に見えなくてもとにかくアクセルを踏んで、一歩進めることが漸くできるようになってきた。同時に、一歩踏み出してしまえば、少しずつでも不安は解消されていくことに気が付いた。

これまでの岐路の選択において、常に不安は付きまとっていたけれど後悔は全くない。いずれの選択も間違っていなかったと自信をもって言えるし、何より、今振り返ってみると悩んだことも含めて楽しかった。これからも、「仕事」と「私事」の両方が自身の希望する理想に少しでも近づくよう、たとえ前が見えなくてもアクセルを踏み続ける姿勢で努力し続けたいと思う。